

公園をみる・観る

= 彼岸花のヒガン =

彼岸花の開花を見ると、自然の律儀さに感心させられる。彼岸のころになると必ず開花し色と造作の美しさで人目をひく。中国からの帰化植物で多年生の植物である。

公園でも咲いた。山口湾沿いの芝地に秋の陽を一身に浴びて誇らしげに立っていた。彼岸花は秋の訪れを周知する代表的な植物のひとつに挙げられる。しかし別名「死人花＝しびとばな」と呼ばれ、毒があるため関わると死んで彼岸に行く羽目になる花、という伝承から一般にあまり歓迎される花ではない。確かに花にはリコリンというアルカロイドを含み、かなり強い毒を持っているらしい。だから素手で触ったときは必ず手を洗わなければいけない。毒は球根の部分にも多く、食すと下痢、嘔吐、中枢神経麻痺などが起こり、ひどいときは呼吸不全で死に至ることもある。なまじ美しいからか妖しく恐ろしい噂の絶えない花だ。

だが、彼岸花はこうした負のイメージを吹き飛ばして余りある有益な植物なのだ。リコリンは熱を通しても消えないが水溶性なので水に晒すと毒が抜け、球根に含まれるデンプンが食べられるようになる。昔、飢饉のときは大切な食物として多くの人々の餓死を救った。草花には年貢が掛からないので昔の農民は田圃の周辺に植えて飢饉に備えていたといわれている。田圃の周辺に植えるもうひとつの理由は、モグラやネズミから稲を守るために彼岸花をバリケードにし、動物たちに稲を荒らされないようにという工夫からだ。墓地の周辺に彼岸花を植えたのも、死者の土葬が主流だったころ、遺体を荒らす動物たちが近寄らないように毒を持つ彼岸花を利用したと考えられている。

薬用としては去痰、利尿、解毒、催吐薬などに有効らしいし、球根を摩り下ろし腫れ物に塗り腫れをとる民間療法もある。まさに毒を持って毒を制するという諺どおりだ。

彼岸花の別名、方言名は1000以上あるらしいが、もっとも知られているのは「曼珠沙華」マンジュシャゲまたはマンジュシャカと言う。これはサンスクリット語で「天上の花」という意味。「おめでたいことが起こる兆しとして赤い花が天から降ってくる」という仏教の経典に由来するらしい。

不吉な花、死のイメージで冷遇されている彼岸花に言わせれば、一年に一度、一週間くらいしか在世しない私たちをもっと暖かい目で見て欲しいと思っているのではないか。彼岸花の悲願が聞こえてくるような秋日和の公園だった。

因みに彼岸花の花言葉は「情熱」「独立」「再会」「転生」など、なんとなく頷ける。(土×土)